

2004年度教育実践総合センター「教育実践」研修講座について

— 活動報告および受講者アンケート調査結果の検討 —

青木真理 (総合教育研究センター・教育臨床学), 中野明德 (総合教育研究センター・臨床心理学)
 昼田源四郎 (障害児病理), 生島 浩 (非行臨床・家族臨床学), 鈴木庸裕 (生活指導)
 宮前 貢 (総合教育研究センター・教育実践学), 水野 薫 (発達臨床心理学)

教育実践総合センター (現・総合教育研究センター) では2004年度, 現職教員を主な対象とした「教育実践」研修講座を開講した。2003年度の6クラスにクラスを追加し, 7クラスを運営し, 夏合宿を含む年間10回の研修を行った。本論では本講座の2004年度の活動について, 受講者に実施したアンケート調査の結果の検討を通じてふりかえり, 現職教員のための研修講座のあり方を探ることを目的とする。

[キーワード] 教育実践 現職教員の研修講座 アンケート調査

1. はじめに

教育実践総合センター (現・総合教育研究センター) では1997年度より, 主に現職教員ならびに教育相談に関わる人々を対象に, 月1回の「教育相談」研修講座を開講してきた (青木ら 1998, 1999, 2000, 2001)。また, 1999年度からは「学校教育」研修講座が開講され, ここでは主に総合的学習の時間の実践の検討を行ってきた。2001年度にはこれらの2種類の研修講座を一本化した教育実践講座がスタートし, クラスの数や内容に変更を加えながら運営してきた (青木ら 2002, 2003, 2004)。

2005年度から教育実践総合センターは, 福島大学教育総合研究センターへと改組されたので, 2004年度は教育実践総合センターとして主催する最後の本研修講座となった。本論は2004年度の活動をふりかえるとともに, 受講者のアンケート調査結果の分析を行い, 2005年度以降も総合教育研究センターの事業として継続されている本講座のよりよいありかたを考察することを目的とする。

2. 2004年度教育実践研修講座の構成

2004年度は前年度の6つのクラスに1クラスを加え, 7クラスで構成されている。各クラスの研修内容についてはのちに詳述するので, ここではクラスの担当講師と簡単な内容を掲げておく。

Aクラス 講師 青木真理 逐語録をとりいれた事例報告をもとに, グループコンサルテーションを行う。

Bクラス 講師 中野明德 事例研究を通じてカウンセリングを学ぶ。

Cクラス 講師 昼田源四郎 SST等のグループカウンセリングを学ぶ。

Dクラス 講師 生島浩 事例研究を中心にしてカウンセリングを学ぶ。

Eクラス 講師 鈴木庸裕 学校ソーシャルワーク, 生活指導の進め方。

Fクラス 講師 宮前貢 授業を考える。

Gクラス 講師 水野薫 発達障害の事例研究。

また, 今年度より有料とし, 年間8200円の受講料一括納入を求めた。

福島県教育委員会の後援のもと, 2004年2月から3月上旬にかけて募集を行った。申し込みの際には第3位までの希望クラス, これまでの受講経験などの記入を求めた。129名の申込者全員に受講許可通知を送り, その後年間受講料納入のあった申込者を今年度の受講者とした。各クラスの受講者数は, Aクラス5名, Bクラス16名, Cクラス12名, Dクラス31名, Eクラス18名, Fクラス10名, Gクラス28名で, 合計120名である。

開催日時は, 月1回, 第3水曜の午後3時から5時まで, D, Gクラスは夜間クラスで同日の6時から8時までとした。

第1回は5月, 最終回は2月に行った。

夏休みの一泊二日の合宿研修は, 前年度に引きつづき, 受講者によって構成された運営委員会の運営で行われた。

9月, 12月と2月には一般の参加者にも呼びかけて「高機能自閉症, アスペルガー症候群の医学」(むさしの小児発達クリニック医長 川崎葉子氏)「認知療法の基礎」(長谷川病院リハビリテーション部長兼クリニカル・コーディネーター 遊佐安一郎氏)「学校臨床における児童精神医学との連携」(クリニックおぐら院長 小倉清氏)の講演会を開催した。

夏合宿を研修2回分とカウントし, 全11回のうち7回以上出席した受講者に修了証を交付した。

3. 本講座受講者

受講者の一覧は表1の通りである。受講者の数は120名で, 昨年の121名とほぼ横ばいで, 有料化による受講生の減少はほとんどなかった。性別では男性は18名, 15.0%で, 昨年度の14.0%と横ばいである。クラス別ではFクラスの男性の占める割合 (70.0%) が高い。

校種別では, 例年通り小学校が最も多いものの, 35.8%と昨年の46.7%からは大分下がり, 研修講座始まってずっと続いた小学校からの参加者が多数を占める傾向は弱まって分散化してきたようである。

表1 受講者

単位：人 A, B, Cクラスの()内は各クラス受講者に占める%, 計の()内は全受講者に占める%

		Aクラス	Bクラス	Cクラス	Dクラス	Eクラス	Fクラス	Gクラス	計
性	男	0(0)	2(12.5)	1(8.3)	2(6.5)	2(11.1)	7(70.0)	4(14.3)	18(15.0)
	女	5(100.0)	14(87.5)	11(91.7)	29(93.5)	16(88.9)	3(30.0)	24(85.7)	102(85.0)
校種	小学校	0(0.0)	6(37.5)	5(41.7)	7(22.6)	7(38.9)	6(60.0)	12(42.9)	43(35.8)
	中学校	2(40.0)	2(12.5)	5(41.7)	4(12.9)	3(16.7)	4(40.0)	3(10.7)	23(19.2)
	高校	1(20.0)	3(18.8)	2(16.7)	9(29.0)	0(0.0)	0(0.0)	3(10.7)	18(15.0)
	養護学校	1(20.0)	3(18.8)	0(0.0)	1(3.2)	7(38.9)	0(0.0)	5(17.9)	17(14.2)
	幼稚園	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	その他	1(10.0)	2(12.5)	0(0.0)	10(32.3)	1(5.6)	0(0.0)	5(17.9)	19(15.8)
	職分	教諭	2(40.0)	11(68.8)	8(66.7)	8(25.8)	13(72.2)	10(100.0)	15(53.6)
	養護教諭	2(40.0)	3(18.8)	4(33.3)	10(32.3)	4(22.2)	0(0.0)	6(21.4)	29(24.2)
	嘱託・非常勤教諭	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	2(6.5)	0(0.0)	0(0.0)	3(10.7)	5(4.2)
	校長・園長・教頭	0(0.0)	1(6.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(3.6)	2(1.7)
	心理職・カウンセラー・相談	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	4(12.9)	0(0.0)	0(0.0)	1(3.6)	5(4.2)
	看護師・保険師	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	6(19.4)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	6(5.0)
	その他	1(20.0)	1(6.3)	0(0.0)	1(23.2)	1(5.6)	0(0.0)	2(7.1)	2(1.6)
計		5	16	12	31	18	10	28	120

職分別では、例年通り教諭が最も多いが、割合は前年59.0%から55.8%に減少している。昨年度すでに校種・職分の分散化傾向が認められた(青木ら 2004)が、本年度はその傾向がさらに強まった。スクールカウンセラー、病院等の心理職、看護師、保健師、保護観察官、柔道整復師、民生委員など、教員以外の職種が増えた。

受講者の出席回数は、平均6.6回であり、ほぼ前年度並である。7回以上の出席をもって終了証書を交付されたのは受講者120名中67名、55.8%にあたる(前年度59.8%)。

4. 研修講座内容

研修講座の内容は各クラス別に後述する。

第1回の5月は全体オリエンテーションを行った。

夏合宿は8月20日・21日(水・木)の一泊二日で行われた。場所は磐梯熱海の浅香荘である。

今年の夏合宿も前年度に引きつづき、各クラスから選出された実行委員による運営で行われた。実行委員長をEクラスの梅原マサ子氏が務めた。受講者数は65名、これに院生・教員15名、講師1名が加わった。

研修内容は以下の通りである

- ① 事例研究
- ② ワークショップ「ロールプレイングによる教育相談研修」講師 正保春彦氏(茨城大学助教授)
- ③ 学術講演「発達障害について」講師 水野薫
このほか、夕食後には交流タイムがもたれた。

9月、12月と2月にはDクラス、Gクラスの講座として学術講演会が開催され、他クラス受講者、一般受講者も合わせて参加を得た。

5. 教育臨床事例研究第4号の刊行

2004年12月には、2003年度の研修講座の報告集として、「教育臨床事例研究」第4号が刊行された。

6. アンケート調査

1) 調査の方法と内容

2月の研修講座で、受講者にアンケート記入を求め即日回収した。欠席者には郵送して回答を求めた。回答者は51名で、全受講者120名の42.5%にあたる。

アンケート内容は以下の通り。

- ① 受講クラスでの研修について
役に立ったかどうかとその理由を訊ね、受講クラスについての意見・要望の記述を求めた。
- ② 夏合宿について
参加・不参加を訊ね、参加者に対し、参加してよかったかどうかとその理由、意見・要望を訊ねた。
- ③ 研修講座への参加について
教育実践研修講座に参加してよかったかどうかとその理由を訊ねた。
- ④ 研修講座の有料化について
2004年度から有料化(年8200円)されたことについての意見を訊ねた(自由記述)。
- ⑤ 「教育臨床事例研究」4号についての意見を求めた(自由記述)。
- ⑥ 来年度の研修講座参加希望について訊ねた。
- ⑦ 昼夜開講制の大学院学校臨床心理専攻の受験の希望について訊ねた。
- ⑧ 大学院科目等履修制度、サテライト授業について、それらを知っているか、利用したいかどうかについて訊ねた。
- ⑨ 教育実践研修講座、教育実践総合センターへの意見を求めた。

2) アンケート結果と考察

ここでは全体での結果と考察を示す。各クラスでの意見の集約は後述する。

① 受講クラスでの研修について

〈役に立ったかどうか〉については、図1に示すように、「役に立った」は全体で47名(94.0%)、と2003年度(91.5%)同様高い割合を示した。

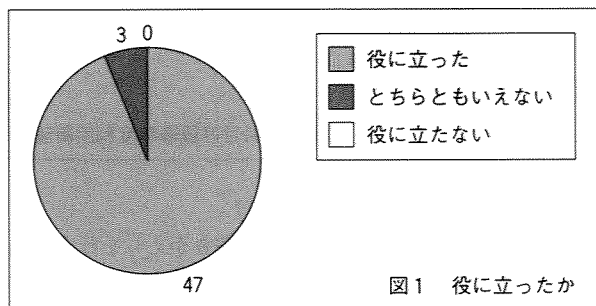


図1 役に立ったか

② 夏合宿について

夏合宿は回答者のうち23名が参加、不参加が28名であった。参加した回答者は全員が「参加してよかった」と答えた。その理由としては、① じっくり事例研究できた ② 正保講師のワークショップ、水野講師の発達障害の講演がよかった ③ 別のクラスの受講者、講師と交流ができたなどである。

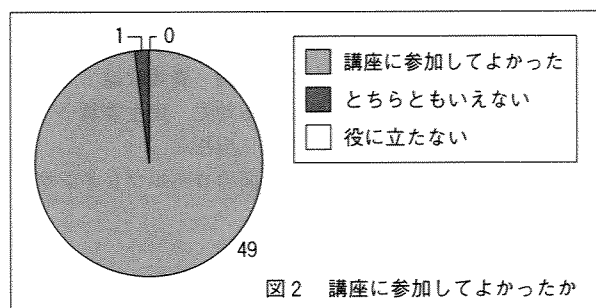


図2 講座に参加してよかったか

夏合宿への意見・要望としては、日程が合わなくて参加できないという意見がいくつか見られた。

③ 研修講座への参加について

〈研修講座に参加してよかったか〉については、「よかった」が49名(96.0%)、「どちらでもない」が1名(2.0%)、と、圧倒的に「よかった」が多かった(無回答1名)。この数字は前年までと同様で、研修講座の評価は非常に高い。

④ 研修講座の有料化について

大学法人化にあわせて2004年度から研修講座が有料化された(年11回、8200円)。そのことについての自由記述の意見(46名)を吟味し、積極的賛成、消極的賛成、反対、態度保留の4つに分けた。その結果を図3に示す。積極的賛成が58.7%、消極的賛成が40.0%である。積極的賛成の意見には「自己研修だから当然」「他の研修でも有料だしそれに比べると安い」「有料になってかえって参加意欲が高まってよい」などがあつた。消極的賛成の意見は「時流だから仕方がない」「無料にこしたことはないがやむを得ない」「中味の充実があれば同意する」などがあつた。有料化はおおむね賛意を得られたとあってよいだろう。ただし、消極的賛成の意見にあるように、有料の前提には当然内容の充実があるといえる。

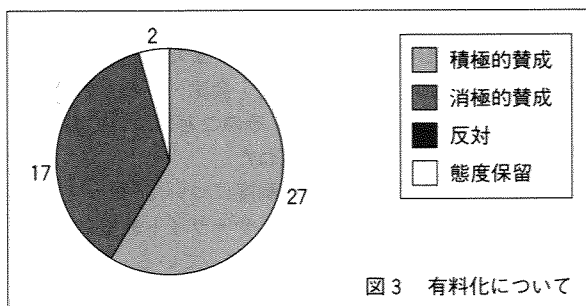


図3 有料化について

⑤ 「教育臨床事例研究」第4号について

自由記述なので無回答もあり、また読んでいないという意見も5件あつたが、参考にしていくという意見が最も多く見られた。代表的な意見として「個々の事例で、いろいろとヒントになったり勉強になったりするところがある。全部詳しく読み切ることにはできないが、折にふれたいへん参考になっている」というものがある。

⑥ 来年度の参加希望

来年度の講座への参加については、図4に掲げたように、47名の回答者中27名(57.4%)が希望すると答えた。この数値は、2002年度の77.5%、2003年度の60.3%と、年々下がっている。有料化についての理解は十分得られているとしても、無料の時代とは異なり、経済的に継続研修はより難しくなっていることがうかがえる。

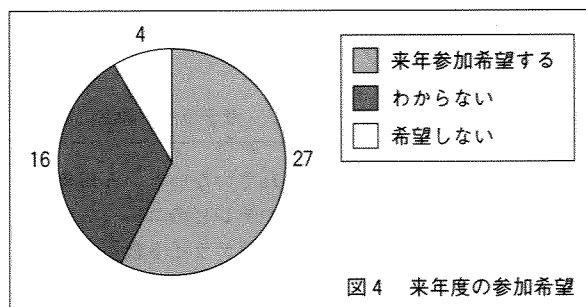


図4 来年度の参加希望

⑦ 昼夜開講大学院学校臨床心理専攻について

2001年度からスタートした大学院学校臨床心理専攻は、昼夜開講で社会人が学びやすい工夫をしていることを示した上で、この専攻の受験を希望するかどうか訊いた。結果を図5に示す。院の受験希望者は回答者46名中の9名(19.6%)であり、希望しない(14名)の方が多い。希望者の割合は2003年度の27.4%よりも低下した。

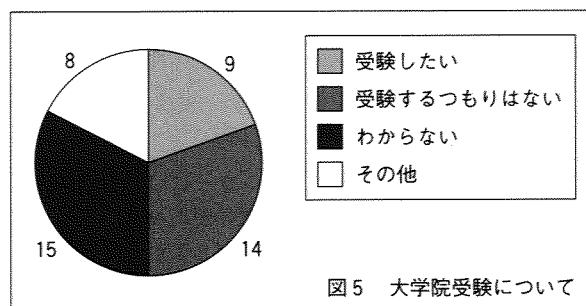


図5 大学院受験について

⑧ 大学院科目等履修制度とサテライト授業

大学院には科目等受講制度があり、また上述の学校臨床心理専攻では一部の授業を、郡山・会津・いわきのサテライト教室を活用して行っている。そのことについての知識、活用したいかどうかについて訊ねた。

回答者48名のうち科目等履修制度について「知っている」が30名(62.5%)である。一方、サテライト教室については回答者48名中42名(87.5%)が「知っている」と答えた。2003年度よりも科目等履修制度、サテライト教室ともに、認知度は高まっているが、2003年度同様に、科目等履修制

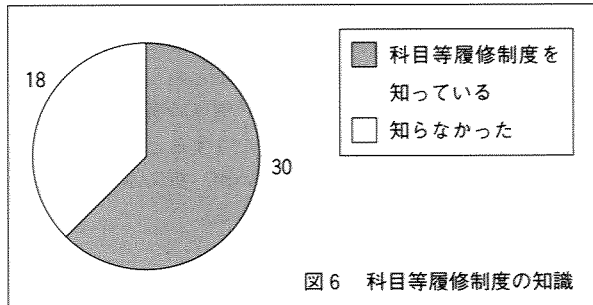


図6 科目等履修制度の知識

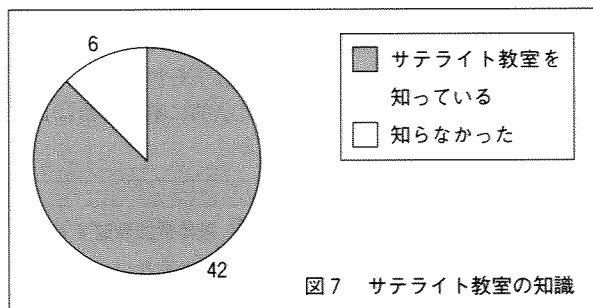


図7 サテライト教室の知識

度はサテライト教室ほどは知られていないという現象が見られる。サテライト教室は新聞やテレビのニュースでも取り上げられているし、公開講座をサテライト教室を使って開催したりもしているので、広く知られているのであろう。

科目等履修制度を利用したいかどうかについては、「利用したい」が17名(38.6%)、「利用したいと思わない」が7名(15.9%)、「わからない」が20名(45.5%)であった。利用したいという回答は2003年度の47.3%より低下している。「利用したくても開講科目がわからないし、手続きが簡便ではない」という意見があった。この点は改善の必要がある。2005年度の大学院学校臨床心理専攻の説明会では、大学院パンフレットに科目等履修に開かれた授業科目一覧を添付した。前年に引き続きサテライトを活用したこの説明会では、大学院希望者だけでなく科目等履修に関心のある人も参加していたので、その人たちへの便宜が改善したといえるだろう。

⑦ その他の意見

本講座、または教育実践総合センターについての自由な意見を求めたところ、次のような意見があった。

- コースが多くなって選択の幅が広がりよかったと思う。
- 教員がこうした研修に出ることについて積極的でない校長もいてなかなか参加できない人もいる。県教委などから校長会等に対し、自己研修推奨の働きかけをしてほしいよう、大学、センターからもアピールしてほしい。

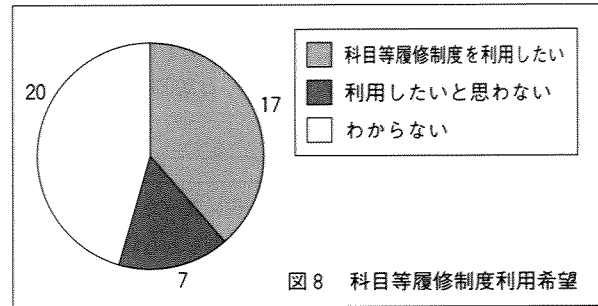


図8 科目等履修制度利用希望

6. クラス別の振りかえり

この項では各クラスの講師による振りかえりを行う。

1) A クラス

Aクラスでは、前年度同様、現在進行中の事例を取り上げ、グループコンサルテーションを行った。事例提出に関しては事例全体の経過のなかに、逐語録を盛り込むことを求めた。研修の内容は以下の通り。

受講者数が少なかったので事例検討以外の内容もとりいれた。

- 5月19日 オリエンテーション 報告の仕方
- 6月16日 教室不適應の女子高校生の事例 養護教諭
- 7月12日 描画法入門、「ひとり力活性化ワークショップ」(ファシリテーター金成美恵 大学院2年)
- 9月15日 不登校小学女子の事例 病弱児学級教諭
- 10月20日 保健室登校中学女子の事例 養護教諭
- 11月17日 母親からの虐待を受ける幼児 民生委員
- 12月15日 不登校中学男子の事例 担任
- 1月19日 対応に困る典型的な場面のロールプレイング
- 2月16日 コラージュ療法入門

参加者の人数が少なかったので全員が事例を提供することになった。受講クラスでの研修が役に立ったかどうかについては、回答者全員が「役に立った」と答え、その理由として、事例を出すことで自分の営みをふりかえり、参加者から意見をもらうことができたということがあげられた。

逐語録により援助対象者とのやりとりをふりかえるなかで、それぞれの援助者がしばしば出会う典型的な場面があることがわかったので、1月にはそういう場面(医療ケアを受けることが望ましいと思われる児童生徒に関しての保護者への医療紹介場面など)をとりあげ、実際にどう対応したらよいかについて、ロールプレイを行いながら、対応の実際を探った。典型場面における適切と思われる対応については、ある程度のマニュアル化が可能かもしれない。次年度は今年度のロールプレイングで確認された対応のありかたについて再度ロールプレイングしてみて、よりよいものにしていきたいと考えている。

(青木 真理)

2) B クラス

Bクラスには16名が登録し、一つの事例に時間をかけて検討した。カウンセリングのノウハウを一部講義形式で行なったが、臨床は個別性を学ぶことにあり、事例研究がその基礎にあるべきと考えている。Bクラスの研修内容は以下のとおりである。

- 5月 全体的オリエンテーションの後、記録の取り方、報告の仕方、及び「最近の子どもの心理」を講義
- 6月 「チック・つめかみがひどく落ち着いて授業をうけることができない生徒との関わり」(高校教諭)
- 7月 「授業妨害・暴力をふるう1年生との関わり」(小学校養護教諭)
- 9月 「自律神経失調症と診断されたN子との関わり」(高校教諭)
- 10月 「抜毛や人への絡みをする高校生徒への対応について」(養護学校教諭)
- 11月 「自閉症児Aと母親との関わり」(養護学校教諭, 小学校事例)
- 12月 「心身症の症状が強くなったことで不登校傾向になり転入してきた生徒A子について」(養護学校教諭, 中学校事例)
- 1月 講義「教育相談のコツ」
- 2月 「家が近く・学級も同じ生徒と相性が合わず不登校になった生徒について」(中学校養護教諭)
- アンケートの自由記述から受講者の評価を一部紹介する。
- ・ 「自分で事例を提出することで、先生をはじめ、クラスの皆さんから適切なアドバイスをうけたことが良かった。また、自分では気づいていない事など、改めて確認することができたことがとても良かったです。自分としては、なかなか方向づけなど、わからない点を指導されたことが良かったです。また、他校種の現状を知る勉強の場となりました。」(養護学校教諭・県中)
 - ・ 「数多くの事例を通して、専門用語を調べる機会をいただいた。小・中・高・養、すべての学校に、生徒理解に努力している先生方がいらっしゃることを知り、一人の親として安心した。今まで自分なりの考えだけで教育相談等を行ってきたが、色々な手法を知ることができた。」(高校教諭・相双)
 - ・ 「いろいろな事例の研究ができて、生徒と接するときに役立つ。」(高校教諭, 県中)
 - ・ 「特に中野先生のアドバイスに意外な発見をした。意見を述べる方たちの話も有意義であった。クラスの後でさらに話し合えたりするといいい。」(大学教員・県北)
 - ・ 「たくさんの事例が聞けて役に立った。『教育臨床事例研究』は、じっくり考える資料として参考にさせていただきます。」(小学校教諭・県中)
 - ・ 「問題や事例に対しての方策や見立てを立てる方法を学んだ。事例に関して細かく分析してくださいますので、問題提起する側、質問・意見を言う側においても、安心した気持ちで研修を受講できた。」(中学校養護教諭)
- 以上のように、評価は全般的に好評であった。特に養護教諭や養護学校教諭にとって、こうした研修ニーズは非常に高いといえよう。研修講座の有料化に関しては、「当然」「高いとは思わない」という意見に集約された。
- (中野 明徳)

3) C クラス

今年度は、登録者は12名だったが毎回の参加者は7～10名程度と理想的な人数だったので、例年よりもセッションを進めやすかった。小グループでのロールプレイを中心に

セッションを進めるので、微妙な数ではあるが、最大15名だとグループの凝集性がわるくなり進行に負担感があるが、10名以下だと全員に目配りしながら余裕をもって進められるので負担感が少ない。SST受講2年目の人たちも混じりセッションに積極的に参加してくれて、大いに助けられた。

できるだけ全員にリーダー体験をしてもらいたいと思いい、毎回90分のうちに2セッションを組み2名にリーダー役をしてもらおうと意図したが、やはり毎回1名にやってもらうことしかできなかった。講師側の都合で2回休講したこともあり、参加者の半数ほどがリーダー体験をできないまま本年度は終了することになり、申し訳なく思っている。ファシリテーターとしての未熟さを感じているが、もうひとつは1年目にはじめてSSTという技法に接し、SSTの流れが十分に飲み込めないうちに、いきなりリーダー役を務めなければいけないので、どうしてもセッションが滞りがちになるのも当然とも思う。しかも1ヵ月に1回、もしくは2ヵ月に1回のセッションなので、なかなか定着しにくいようだ。これが2週間に1回の頻度で10回1クールという頻度だと、より早く慣れるのかもしれない。

Cクラスの構成からいうと、登録者は最大12名程度とし、そのうち3～5名が2年目生というものが、これまでの体験からすると良さそうだ。今年度も毎回のセッションをビデオに撮り、SST記録として原稿に起こし、参加者に配布した。これは参加者にとっても役立ったと思うが、ファシリテーターとして各セッションを振り返る良い機会になった。SST記録作成の労をとってくれた院生の斎藤美穂さんと岩崎陽子さんに感謝したい。

参加者が現場で遭遇した事例をテーマとしてセッションを進めることができたので臨場感があり、参加者にとっても実際の学校現場でどうSSTを活用するかという具体的なイメージが共有できたと思う。2年目の参加者のなかから、実際の学校現場で使ってみて手応えを感じたという報告もあり、うれしかった。

SSTには、①ピアグループの活用と②ロールプレイの活用という二大構成要素がある。一種のグループカウンセリングという①の側面は重要だが、②のロールプレイは生徒と教師が1対1といった保健室の面接場面などでも活用できる。これまでグループカウンセリングという側面を強調しすぎて、“集団でなければいけない”という誤解を与えてしまった反省から、これまでの「グループカウンセリングとSST」という講座名を改め、平成17年度からは「SSTとソーシャルスキル教育を学ぶ」として再出発したいと考えている。

(昼田源四郎)

4) D クラス

受講者は31名、それに大学院生が「臨床心理基礎実習」の授業として加わり、司会と記録を担当した。

本コースは、事例研究により問題行動のある生徒やその家族に対する援助について学ぶことを目的としているが、その概要は以下のとおりである。事例報告者には資料の用意を求めたが、必要な修正を施し、配付資料を回収するなどプライバシーの保持には最大限の配慮を行った。

また、平成16年9月の学術講演会はEクラスの水野が、

平成16年12月及び平成17年2月の学術講演会は生島が、それぞれ企画したものであり、本講座の一環として実施した。

- 5月 今後の予定、参加者からの事例募集、事例検討の方法について説明
- 6月 吉井幸子（小学校教員）「暴力・いじめ・孤独と孤立からスタートしたA君（小学3年生）の1年間」
- 7月 穂積千鶴子（高等学校養護教諭）「不就労の父親との関係で悩む高2女子生徒」
- 9月 学術講演会「高機能自閉症、アスペルガー症候群の医学—臨床特徴と療育—」講師：むさしの小児発達クリニック院長 川崎葉子先生
- 10月 助川純子（精神科病院臨床心理士）「19才の不登校・引きこもりの女性の母子面接」
- 11月 大久保淳子（保健福祉センター保健師）「小学5年生の男児がパニック発作を起こし対応に困っている家族を支える学校との連携—行政が行っている保健活動と学校の連携について—」
- 12月 学術講演会「認知療法の基礎—システム論との関連から—」講師：長谷川病院リハビリテーション部長 遊佐安一郎先生
- 1月 渡邊さとみ（精神神経科診療所看護師）「思春期の解離性障害について—家族療法からの一考察—」
- 2月 学術講演会「学校臨床における児童精神医学との連携—教員に知ってもらいたい精神医学の基礎知識—」講師：クリニックおぐら院長 小倉清先生

参加者が、小・中・高校の教員、養護教諭、スクールカウンセラー、さらには、児童虐待に関わる保健師や精神医療に従事する看護師・臨床心理士など幅広い領域にわたっていることが特筆され、検討された事例も不登校・引きこもり・児童虐待・精神障害と多様である。そのため、アンケートには、「学校の中にいるだけでは一人職という立場もあり、自分の考えの中でしか解決できないが、研修を受けることにより色々な考え方を知ることができた」、「“学校”というところがどういうところか、分かってきたように思います。今後の仕事に生かします」といった多様な職務の参加者が、自分とは異なる臨床現場の事例を検討する機会が得られたことを評価するものが多かった。このように臨床的な観点を広げる中から、「支援の方法について様々な意見が出るのが良いし、研修を受けるなかで自ら抱える問題も少しずつ改善に向かうことが出来た」との感想も寄せられている。

一方、「教室が狭く、机・椅子も小さい」、「冬場の夜間講座であるのに暖房が効いていない」とのクレームもあり、講師のコメント時間を増やし、グループ・スーパービジョンと呼べるまでに内容を高める努力を続けていきたい。

(生島 浩)

5) E クラス

Eクラスでは、スクールソーシャルワーカーと特別支援教育コーディネーターの養成を目的として、学校、家庭、地域・関係機関をつなぐ教師の役割と方法技術について実践的学習を重ねてきた。特殊学級や養護学校、養護教諭、通常学級の担任を中心に、18名程度の受講者で、ほぼ受講者全員がみずからの事例や実践を報告し、場合によっては

経過の報告（継続実践の報告）も取り入れ、毎回、実践分析を主とする講座運営で実施した。

2004年度から多くの小中学校で設置がはじまった「特別支援教育コーディネーター」のあり方、養護学校などすでに展開してきた地域の学校支援体制からコーディネーターの設置あるいは養護学校のセンター化構想での役割などを素材としつつ、まだ地域教育行政の段階では準備段階に当たる「養成プログラム」の試行という意味で、内容づくりをおこなった。

当初、講座では、「これからの特別支援教育」をめぐる施策動向や特別ニーズ教育の視点から問われる課題、海外での動向を紹介・検討するデスクッションとワークショップをおこない、その後、毎時間、実践報告とそこでのまとめのレクチャーをおこなった。子ども理解、保護者との連携、校内チーム、学校外関係者との連携等の個別援助技術（パーソナルワーク）、間接援助技術（グループワーク）、地域的支援に関するリエゾンワーク（コミュニティーワーク）の手法や考え方について、テーマごとに分節化してまとめていった。なお、同じ学校からの参加者もあり、グループでの実践報告もあった。

講座のテーマについて、なによりも重視したのは、新たに教育現場に降りてきた考え方や教育システムではなく、従来、それぞれの学校や教師個人としてたち振る舞ってきた「実践の事実」に立脚しながら、それぞれの持ち味を活かし、子ども、家庭、同僚、スクールカウンセラー、医療機関、福祉関係機関などの学外支援者とのつながりを振り返る作業を実践分析のねらいとした。また、できるだけ、資料を作成し配布したり、独習の補助にも気を配った。

具体的な実践報告のまとめの詳細については、別途「報告書」で報告するが、タイトルの概要は以下の通りである。

健康相談活動を通じた校内連携、養護学校での巡回指導、養護学校と通常学校との連携、軽度発達障害の子どもへの授業実践、スクールカウンセラーや精神科医との連携、養護教諭のコーディネーター機能、教師による保護者と福祉機関との関係調整、適正な就学指導のあり方と地域連携、学級担任としての役割。これらの報告を受け、毎回全体討議方式で進めていた。すべての参加者が直接特別支援教育の事業に携わっていない場合もあり、来るべき日への準備という受講生もいたが、基本的には「これからの学校教育のありように子どもや家族が合わせるのか、それとも人々のニーズに学校が改変していくことを真摯に考えるのか」という根っこの議論が講座全体で追求できたことはよかった。

講座の中でその役割や考え方を提起していったスクールソーシャルワークについて、まずは学校教育教職員にとってどのような取り組みと重なり、どこにまた独自性があるのか。スクールカウンセラーとの役割分担や手法・アプローチの違いなど、これからの学校支援のシステムを考えていく上での「人材」の活用について、話題提供し、受講者の今後の実践的視野や力量形成に役立つよう心がけた。

今回の講座では、受講者のニーズ調査をおこない、それらを精査して分類し、それを受講生全体で確認しすめていった。この方式では、客観的な人材養成の点で一定の偏りや講座運営側の意図性が強くなることも予想される。今後の課題として、まだ、本格始動とはいえない特別支援教

育コーディネーターの養成と学校におけるソーシャルワーク機能の担い手養成を主眼に、般化しうる実践モデルづくりの試案を作成する必要がある。

(鈴木 庸裕)

6) F クラス

① 研修のねらい

昨年度まで、Fクラスでは、「総合的な学習の時間」にかかる内容を中心に研修を進めてきた。しかし、このクラスに参加する受講者にとって、もっと切実で、真剣に考えなければならない課題は「授業」にあることが分かり、今年度から、「授業を考える」を中心テーマに掲げ、この講座をスタートさせた。

数少ない受講者ではあるが、第1階の研修講座で「学力向上を目指す授業の実践」に努めているが、自分の授業実践がこのままでいいかとも不安だという声が多く出され、受講者自身の授業改善に寄せる思いの強さを実感した。

宮前自身も県内の小・中学校の授業を数多く参観させていただき、このことを感じることもあり、とにかく「日々の授業実践と改善」についてじっくり考えていくことにした。

宮前が授業を参観して特に気になることは、授業における「子どもたちの話し合いが貧弱になっていること」である。授業は、多くの子どもたちの多様な考えについて話し合い、よりよい考えやより価値のあることを追究していく子どもたちの共同作業である。教師の仕事はこの活動を組織することで、教師はそのために全力を注いでいかなければならない。授業の中で、子どもたちに自分の考えを持たせること、それを教師が掘り起こし、話し合いの筋道をつけることなどは最低限どうしてもやらなければならないことである。それができていない。授業のイロハがきちんできていないことが多いように思う。

そこでこの講座では極力自分の授業をビデオで記録したものを持ちより、その授業ビデオを視聴して、授業の望ましい展開を協議することに努めた。

今年このような形でスタートした研修が、少しずつ各学校の校内授業研究などにも生かされていくことを願っている。

(宮前 貢)

② 方法と内容

授業についての事例検討をビデオ分析を基に討論会を行った。概要については以下の通りである。

5/19: ①学校教育の現状と課題

- ・講師からの講義後討論

6/16: ②教材研究と生徒理解

- ・中2 社会（歴史）のビデオ分析

7/21: ③T・Tの在り方

- ・小4 保健体育のビデオ分析

8/20: 21 (合宿)

- ・学校教育相談に関する研修

9/15: ④グループ活動の留意点

- ・中1 数学科のビデオ分析

10/20: ⑤国語教育における読解の指導

- ・小5 国語のビデオ分析

11/17: ⑥歴史学習における導入

- ・中2 社会のビデオ分析（導入部）

12/15: ⑦英語科での動詞の活用について

- ・中1 英語科のビデオ分析

1/19: ⑧国語科での話し合い活動

- ・小5 国語科のビデオ分析

2/19・20: (合宿) ⑨「授業」について

- ・佐藤学著「教師の挑戦」についての討論

③ 受講者の感想

ここでは特に、教科指導の充実についての話をしていた。育てる学力として、思考力・判断力・問題解決などの諸能力を働かせて学び、確かな基礎・基本を身につけることが大切であるということである。それは、全学年共通で実行すべきで、具体的には、全教師が互いに授業を見合い見せ合いながらともに高め合う集団づくりが必要であるということである。教師はつつしみ深く学ぶ、つつしみ深く聴くことが大切であるのに、今、子どもの話を聴き多様な考えを引き出す授業になっていない。これが授業のパターン化、固定化になっているという問題点を指摘された。この授業のパターン化、固定化が以下のようなことを生み出しているということであった。

○子どもの「話し合い」の貧困・貧弱化

○思考・判断力を育てていない

○「ともに学ぶ」よさを実感させていない

学習指導案の中によく「・・・について考え、話し合う」という表現が使われる。この時に、子どもに自分の考えをノートに書かせていなければ、子どもが自分の考えをもつことはできないし、話し合いに参加することもできない。教師は、子どもの考えを机間指導しながら把握し、授業の話し合いの中で子どもの発表を繋ぐ役割を果たさなければいけない。こういう考えから、学習指導案の中には、「○○と○○○を関連づけて自分の考えを持たせ、それをメモしてから話し合わせる」という表現になるのではないか。

また、教師は授業の中でやることをいっぱい盛り込みすぎで話し合いが成立しないという話にもなった。これでは、子どもが学ぶ喜びを味わうことができないということであった。

私たち教師は、子どもの学ぶ喜びとは何かを考え、それを実践に結びつけられるようにしていかなければいけないことを感じられ、たいへん有意義な実践講座であったように思う。

(福島大学大学院1年 佐藤 亮)

平成16年12月15日(水)は、私の拙い英語授業のビデオを本講座で分析資料として使ってもらった日であった。校内研修の一環として私なりに精一杯やった授業ではあったが、宮前先生はじめ講座の先生方にご意見が伺えることとなり、朝からとても楽しみであった。

ビデオを見終えて、まず講座の先生方から感想とご意見を頂いた。本時の目標である、グループ活動における「学び合い学習」に関して、生徒の動詞のバリエーションをもっと増やせないか、小・中学校の英語教育の連携の強化が重要、真の speaking（話すこと）とは何か、代表生徒の発表の良さについてもっと話し合うべき、など、様々な鋭い

ご意見を頂戴した。

次に、宮前先生よりコメントを頂戴した。先生は、常に『一人ひとりの生徒の立場』に立ってご意見を下さった。①一人ひとりの生徒から見れば、本時の授業では練習量は十分か、②英語の授業にありがちな「生徒が追まわられるような状況」を作っていないか、③遅れがちな生徒を授業に引き込み、生徒の中にある既成の序列観をどのように打破すべきか、④参観者から頂戴したコメントを積極的に生徒達にフィードバックしているか、⑤多数の授業参観者がいる授業研究会の意義や「読解力・思考力」をつける必要性、などがその主な内容であった。

宮前先生は、まず第一に授業者に敬意を払い、授業者のねらいや思いを的確にとらえてくれることに驚かされる。また、その類い希なる「授業への熱い思い」を切々と我々現場教師に語ってくれる。このことが、毎回私を奮い立たせ、明日の授業への意欲を喚起してくれる。さらに、そのような先生の「思い」を、県内各地で実践されている先生方が数多くいらっしやることも知ることができた。

昨年までの研修講座（A・B講座にも参加）とはひと味違った本講座に参加出来たことを誇りに思うと同時に、教師の根幹である「授業こそ命」という事実を改めて実感し、これからの実践を誓った一年となった。宮前先生をはじめ、講座の先生方、研修に協力下さった関係各位にもう一度感謝申し上げたい。

（須賀川市立西袋中学校 教諭 二瓶 裕一）

学び合いの授業を目指したい。教職10年を過ぎた頃から、今までの自分の授業の課題を整理したいと考えていた。課題とは、自分の授業が「学び」と言えるのかという疑問である。今までは、子どもたちが自分の考えを出し合いながら、授業のねらいにせまっていって姿が大切だと感じてきた。しかし、必要性を強く感じていたわけではなかった。学び合いも大切だが、時間がかかり過ぎたり、思うような児童の伸びを、短時間で見つけたりできなかったからである。学び合いの授業も大切だが、余裕がある時だけに行うという状況だった。ところが、このようなやり方では、児童の学びの力は育たず、強いられる学習になっていた。そして、ここが大切なのだが、生徒指導面に成長を感じられなかったのである。「学びがある学級は決して崩れない。」という佐藤学先生の至言が頭に残ったのもそのためであった。しかし、この思いと現実のギャップを埋められずにいた。

そんな中、Fクラスの受講の機会に恵まれた。F3クラスでは、授業のビデオを通して、「学び」について考えている。この講座で宮前先生の講話をお聞きし、学び合いの授業を目指していこうという思いを強くすることができた。この道はたやすいものではない。子どもを信じ、学びを子どもと創り出していく情熱と理念と行動力がなければたどり着けない。子どもたち全員に考えを持たせる時間を確保し、その考えを、互いにすり合わせて聞き合わせ、学びの成長を一人一人見取ることが必要だからである。それでも、授業に「学び」が生まれれば、子どもたち同志が互いの信頼感や学びへの充実感が感じられるのである。そんな授業を創り出すことができれば、いや、創り出そうと続けることができれば、子どもたちが変わっていくのだと思う。教師として、教えることばかり目がいってしまう現

在だからこそ「育てる」ことについて、立ち止まって考えることが必要なのだと思う。

Fクラスを受講し、自分の中で、点のいくつかを線でつなぐことができた。宮前先生と受講の先生方に感謝したい。
（会津若松市立門田小学校 教諭 齋藤 勝芳）

昨年度、「総合的な学習」（以下、総合）に関して学びたくて受講した。総合が始まって依頼ずっと低学年を担当し、総合の実践をしていないのが大きな理由である。総合での学びを追っていくうちに、学校で最も大切にしなければならない『授業』に目を向ける必要を感じた。

学校の現場は多忙で、私の今年度の空き時間は、週1時間。教材研究が充分にできないジレンマがある。校内研修も行なわれているが日々の授業につながるものになっていないのが現状である。授業の基本に立ち返りたく受講した。ビデオを視聴する形だが、受講生が自分が児童・生徒なら、指導者ならとその立場に立って協議できたのは意義があった。「T・T指導の効果を考えた授業」とは、「導入（資料提示）の在り方」とは、「話し合い活動（練り上げ）のポイント」は等々、全事例に参加出来なかったが、日々授業をする上で役にたった。また、夏期合宿での事例研修や学術講演は、学校現場での“今知りたいこと”に役立てられるよい機会であった。

本校では、研修主題『学びの心を育む授業の創造』—表現力を高める授業の創造—を設け、算数科の授業で取り組んできた。

受講を終えて、『1時間の授業の中で、どこに児童の学びが成立していたか』という授業反省の視点を得ることができた。校内研修の授業参観と授業分析においても、この視点をもって研修したい。また、過日校内現職教育においても、新年度にむけてこの視点の大切さを提案した。

（川俣小学校 教諭 橋本 康子）

今年度、職員研修の一環として本講座に参加させて頂く機会を得た。諸事情で参加できなかった先生方に、私が本講座で学んだことを少しでも伝えることができればと思う。

本講座に参加するにあたって最初は、授業についての大切なポイントなどを講義形式で聴くものばかり思っていた。しかし、全く逆だった。毎回、実際の授業（VTR）を観て、自分はどうか、自分の授業観を問われるような研修だった。同じ授業を観て、一人一人が違った角度から感想を述べ合うだけでも十分刺激となり学ぶことがたくさんあったが、最後にさり気なくお話しされる宮前先生の授業観は、授業の本質にせまるものばかりで、改めて「なるほど」と感心したり、自分の未熟さを思い知ったり、授業の難しさを痛感する研修の連続だった。

本講座で私が特に心に刻んだことを要約したい。

1. 授業で観るのは、「子どもの姿」である。

当たり前のようにだが、これまでの自分を振り返ると、授業者である自分が何をどうすればよいかということにばかり気を取られて、子どもの姿（内なる思い）をしっかり観ていなかった気がする。当然、他の授業を参観する時も、教師の動きばかりを見ていた。

宮前先生が、本校の授業を参観される時は前でも後ろで

もなく、さり気なく子どもの表情や動きが見える斜め前の場所である。子どもの姿をよく見るだけでなく、授業の妨げにならないようにという温かい配慮からである。

事例研修では、子どもの姿を見て授業を考えることを通して、教材研究や児童理解を深めることの大切さを改めて痛感した。

「子どもが主役となる」授業をめざしたい。

2、「自分の考えを持つ」喜びを味わわせる。

本校では、「学ぶ喜び」を中心にすえて「確かな学力」を身に付けさせようとして取り組んできた。自分の考えを意識させることが話し合う基盤であることを宮前先生から教えて頂いた。学ぶ喜びは、主体的な学びの中で味わえるということ子ども達の姿を通して実感することができた。

「自分の考えを持つ」・・・事例研修の意義が正にそこにあるのではないかと思った。お互いの考えを自由に言い合った後は、いつも宮前先生が話し合いの内容を適切に意味付けて下さった。子ども達に自分の考えを持たせ教師が意味付けてあげることで、価値ある話し合いになることを学んだ。

(塩川小学校 教諭 荒明美恵子)

「学校は内側からしか変わらない。しかしそれは外部の支えなしには継続しない。」

宮前先生が金透小学校長時代に総合学習の公開の際、佐藤学氏の言葉を引用して言われた言葉である。本校においてまさに「外部の支え」として、年間4回の授業研究会に授業参観、指導講演の機会をいただいた。さらに本校の授業研究会にとどまらず、本研修講座をビデオ分析により追加指導をいただいたり、西郷村の基礎学力支援事業の研修会にあてさせていただいたり、研修の深まり、広がりを見ることができたのも有意義であった。

国語科の授業者として私自身が一番学んだことは、①生徒に自分の考えを持たせる。②話し合いの組織化は教師が行う。そのためには無駄をそぎ落とす。③クラスで「気になる子」と一時間の中でどう関わるかイメージするなどである。最後の単元・中1・「少年の日の思い出」で①～③を意識してやってみた。今までよりは生徒と「教材を通して生き方を語り合う」という手応えはあったと思うが、さらに授業の難しさ、楽しさを追究していく教師になりたいという思いが強くなっている。

宮前先生のコメントの特徴は、授業についての「教師の思い」をよく汲み取ってくださるところである。

社会科の授業において導入が長すぎた反省が出されたのだが、それに対しては「どの子ども大事にしようという優しさが出た結果ですね。」という日頃の教師の関わりの良さを認めた上で代替え案を提示して下さった。また、4回目の授業研究会で行われた社会・理科・家庭科の指導講演では各教科の共通性、相違性などを具体的に説明していただいた。

本校は今年度「基礎学力支援事業」の指定を受け学力向上を目指し主題：「個人差に応じた指導の工夫」、副主題：「学習速度と学習達成度に配慮して」を掲げて取り組んできた。これまでの指定事業を受けての報告では授業周辺部での成果が目に見える成果としてはわかりやすく、数多く報告されており、本校の報告でもそれが求められている

一面もあると思うが、教員の資質向上という長期的視野に立った授業改善の取り組みなしに真の学力向上はなし得ないという確信を得た一年であった。

(西郷第二中学校 教諭 榊原 康夫)

④ 成果と課題

参加者の感想から、学んだことの共通項として、

①学び合いの授業のための第一要件として、

「自分の考えを持たせる時間の確保」「自分の考えが持てれば他者の考えにも興味が行く」こと、そこから互いの意見のすりあわせが行われる。

②話し合いの組織化が教師の役割。

③遅れがちな生徒の授業への引き込みの重要性。

④子どもの姿をとらえた授業研究会などが挙げられる。

参加した教師全員が授業力の向上を目指したいと本気で考えるようになった。そのための視点、例えば林竹二の教え「どの子どもも学びたがっている」や、学んだ証は「子どもが変わること」、教師は子どもを「見てない」「見えない」「見ようとしていない」などのことについて、授業の事例検討を通して実感し、自分の実践を改善しようという意欲につながっている。課題としては、今年度の教師研修を生かした授業の更なる質的向上と教員仲間のネットワークを基にした相互研鑽の広がりを目指したい。

(宮前 貢)

7) G クラス

Gクラスは、昨年度のDクラスを二つに分けたうちの一つで、発達につまずきのある子どもの理解と対応について、事例研究を中心に授業を進めた。受講者は28名で、小・中・高等学校、盲・ろう・養護学校の教員、スクールカウンセラーなどのほかに、大学院生が「臨床心理基礎演習」の授業として加わって司会と記録を担当した。講師は水野が担当した。9回の講座のうち3回はDクラスと合同の学術講演会とし、外部講師を招いての研修を行った。なお、9月の講演会は水野が、12月と2月は生島が企画した。

5月 オリエンテーション、本クラスの進め方、事例募集、「発達障害児のケースレポートの書き方」

6月 事例研究1 担当者提供による事例研究「言語性LD周辺児の読解指導」を素材にして、「ケースレポートの要点」「発達障害児の事例研究の進め方」を学ぶ。

7月 事例研究2 受講者による事例提供1 「ADHDの範囲とされるA男」小学校教員

9月 学術講演会 「高機能自閉症・アスペルガー症候群の医学―臨床特徴と療育―」講師 むさしの小児発達クリニック院長 川崎葉子氏

10月 事例研究3 受講者による事例提供2 「対人関係に悩むC子」高等学校教員

11月 事例研究4 受講者による事例提供3 「自閉症のD男」小学校教員

12月 学術講演会 「認知療法の基礎―システム論との関連から―」長谷川病院リハビリテーション部長兼クリニカル・コーディネーター 遊佐安一郎氏

1月 事例研究5 受講者による事例提供4 「対人関係のトラブルが多いE子」高等学校教員

2月 学術講演会 「学校臨床における児童精神医学との

連携-教員に知ってもらいたい精神医学の基礎知識-」
クリニックおぐら院長 小倉清氏

発達障害児の学習や適応上の困難を理解するために、背景にある発達の偏りや総体的な発達の状況、発達歴、治療・教育歴、学校、家庭、関係機関の対応などについての情報を下に、グループで協議し「見立て」を行った。さらに、各グループの意見を共有することによって事例理解を深め、具体的な対応策についての検討を深めていった。受身的に話を聴くのではなく、受講者一人ひとりが自分の意見を持ち、共有することによって、積極的に参加することができた。学校種別、立場の違う事例提供者による発表は、受講者にとっては視野を広め、軽度発達障害児についてのより深い理解につながったという感想が多く寄せられている。

(水野 薫)

7. ま と め

2004年度の本講座も、前年度までと同様、受講者からおおむね高い評価を受けた。研修の方法と内容として、事例研究法（発達障害の事例に特化したクラスが加わった）、グループカウンセリング、コンサルテーション、特別支援教育コーディネーター養成、授業研究と、より多様になった。

有料化による参加者の減少は見られなかった。

夏合宿の、受講者による運営スタイルも定着してきたように思われる。

今後の課題として、教育委員会との連携を強めるなどして、受講者が一層参加しやすくなるための工夫が必要であろう。

文献

- 青木真理・中野明德・鈴木庸裕・昼田源四郎・三石初雄「教育実践総合センター『教育相談』研修講座について 1997年度活動報告および受講者アンケート調査結果の検討」1998 福島大学教育実践研究紀要第34号
- 青木真理・中野明德・鈴木庸裕・三石初雄・水谷由克「教育実践総合センター『教育相談』研修講座について 第2報 1998年度活動報告および受講者アンケート調査結果の検討」1999 福島大学教育実践研究紀要第36号
- 青木真理・中野明德・昼田源四郎・水野晴夫「教育実践総合センター『教育相談』研修講座について 1999年度活動報告および受講者アンケート調査結果の検討」2000 福島大学教育実践研究紀要第38号
- 青木真理・中野明德・昼田源四郎・水野晴夫「教育実践総合センター『教育相談』研修講座について 第4報 2000年度活動報告および受講者アンケート調査結果の検討」2001 福島大学教育実践研究紀要第41号
- 青木真理・中野明德・生島浩・中田洋二郎・鈴木庸裕・水野晴夫・昼田源四郎「教育実践総合センター『教育実践』研修講座について 2001年度活動報告および受講者アンケート調査結果の検討」2002 福島大学教育実践研究紀要第43号

青木真理・中野明德・昼田源四郎・生島浩・中田洋二郎・鈴木庸裕・水野晴夫「教育実践総合センター『教育実践』研修講座について 2002年度活動報告および受講者アンケート調査結果の検討」2003 福島大学教育実践研究紀要第44号

青木真理・中野明德・生島浩・中田洋二郎・鈴木庸裕・宮前貢「教育実践総合センター『教育実践』研修講座について 2003年度活動報告および受講者アンケート調査結果の検討」2004 福島大学教育実践研究紀要第46号

(2005年9月30日受理)